

のではなく、さまざまな事象を微細に描きながら、ことばの用いられ方や意味を丁寧に解釈し、その限界を超えるだけの厚い民族誌として仕上げている。本書から浮かび上がる「生きていても仕方がない」生を、「それでもなお生きる」人びとの姿は、著者が実践や自らのフィールドでの違和感から理論的枠組みを構築するという人類学的方法のなかで明らかにされている。彼らとともに濃厚な時間を生き、高齢者たちの生活を生き生きと描きだした本書は、一読者として「共にそこにいる」臨場感を味わえる立体的な民族誌であるとする。

引用文献

中村沙絵. 2011. 「現代スリランカにおける慈善型老人ホームの成立－ダーナ実践を通じたチャリティの土着化」『アジア・アフリカ地域研究』10(2): 257-288.

藤井千晶. 『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか－タリーカとスンナの医学』ミネルヴァ書房, 2018 年, 272 p.

池邊智基*

本書は、東アフリカのタンザニア共和国沿岸部に位置するザンジバル島における、民衆のイスラーム実践を詳細に描いた研究をまとめたものである。本書の目的は、タリーカ（イスラーム神秘主義教団）とスンナの医学

（預言者ムハンマドの言行に基づく医学）の実践をとおして、東アフリカにおける民衆のイスラームを考察することである。この2つの対象はそれぞれ担い手も実践空間も異なる事例である。しかし両者に共通しているのは、ともにイスラーム的な伝統を受け継ぎながらも、ザンジバルの社会的な状況に対応しながら変容を続けてきた点である。その意味で著者の問題関心は一貫しており、本書では「教義としてのイスラームの普遍性」と「民衆の多様な実践」の記述を通じて、時代や社会的背景に応じて柔軟に「正しいイスラーム」へ向かうための再解釈が続けられてきたことが詳細に示されることになる。

本書は全4部構成、全13章である。それぞれの章を概観しよう。

序章では、東アフリカのイスラーム研究の歴史が概観される。これまでの研究ではイスラーム知識人の活動や著作についての蓄積はあるものの、民衆レベルの実践についてはイスラーム的な要素が議論の中心に置かれず、儀礼や民間信仰、シャーマニズムなどを中心とした調査がされてきた。そのために東アフリカでは中東に比べて遅れた「田舎イスラーム」が実践されているという認識が絶えず存在していたことが述べられている。

第I部では、東アフリカにおける民衆のイスラームについての先行研究が概観される。第1章では、「民衆のイスラーム」とイスラームがもつ地域性について、これまでの研究とその問題点がまとめられている。まずイスラーム知識人などの宗教的権威に属する「公式イスラーム」（ないしは「規範的イス

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ラーム)」と、民間信仰的な「民衆イスラーム」という、長らくイスラーム研究において用いられてきた二分法の議論に対する批判が説明される。東アフリカのイスラーム研究に絞ったレビューでも、同様に「高度」で「正式」なイスラームに対置されるようなかたちで、現地で行なわれる儀礼などの宗教実践は、「低度」で「民間起源」であるとされてきたことが述べられる。そうした「民衆イスラーム」という概念設定は、クルアーンやハディースから逸脱した、劣った宗教実践という印象を与えてしまい、イスラーム的に正しくあろうとするムスリムの意志を無視してしまいかねない。そのため、本書では「民衆のイスラーム」という言葉を使用することが宣言されている。「民衆のイスラーム」の概念には、日常生活を送るムスリムが、絶えず正しいイスラームを希求し、クルアーンやハディースに基づいたさまざまな伝統を常に呼び起こし、参照し、試行錯誤を繰り返し、実践を続けている、という含意がある。第2章では、東アフリカ沿岸部・スワヒリ地域の地理や歴史、言語や民族について説明されている。スワヒリ地域はアラビア半島との交易都市としてイスラーム化とともに発展してきた。特に19世紀に入ってからのもハーサード朝によるオマーンからの統治によって、オマーンとザンジバルの緊密な関係が形成された。その結果イエメンのハドラマウト出身者などの知識人との交流があったことが描かれており、そしてそれがタリーカの浸透の契機ともなったことが示されている。

第Ⅱ部では、東アフリカのタリーカについ

ての概略的な説明がなされ、ザンジバル島におけるタリーカの組織形態やその運営状況、宗教実践の詳細な内容について描かれている。第3章では、東アフリカのタリーカについての先行研究の整理と、著者が実際にザンジバルで観察したタリーカの詳細な分類が行なわれている。続く第4章では、タリーカの内部で実践されている預言者生誕祭（マウリディ）の様子やそのプログラム構成などのさまざまな事例から、現在のタリーカの活動について全体像をとらえる試みがなされている。第5章ではザンジバルで現在活動している各教団の起源や、現在のタリーカの特徴をあげながら、過去から現在の状況にいたるまでの変容の原因についても考察されている。その変容のひとつの要因として、ザンジバル革命の影響で国内にいたアラブ系への迫害があった。教団の師弟関係の系譜（スィルスィラ）は、教義を正式に受け継いだ歴史を示すために書き残されるものであるが、アラブ系とのつながりが明らかとなるために、教団への弾圧も起きかねない。それゆえに、教団の内部で系譜の保存を避け、現代では系譜が忘却されてしまう状況が生じた、と著者は説明している。

第Ⅲ部では、クルアーンとハディースに基礎を置くスンナの医学に焦点があてられている。第6章では、ザンジバルで実践されているスンナの医学の基礎となった「預言者の医学」について、その歴史や治療方法として発展した過程、書かれた著作物の情報が概説され、続く第7章では、ザンジバルに存在する医療について、先行研究と著者の参与観

察からの情報をあわせて検討がなされている。第 8 章では、ザンジバルの伝統的な治療実践のひとつであるウガンガと、スンナの医学の詳細な比較が行なわれている。ウガンガは身体の不調や人間関係、精神的な病や原因不明の病などの原因をジニ（精霊）に求める。治療、すなわちジニを追い払うにあたっては、呪医が預言者の医学の著作を参照しつつ、薬草や香油、魔法陣などを用いたり、クルアーンの朗読をしたりする。スンナの医学も同様に、ジニに病因を求め、預言者の医学を参照しているが、治療者はクルアーン学校の教師である。ウガンガと同様の治療方法がとられるものもあるが、魔法陣などのモノ信仰は「非イスラーム的」な要素であるとして排除している。第 9 章では、スンナの医学の知識を発信する情報媒体や、治療者と治療所、治療内容と対象となる病と問題、病との付き合い方について論じられている。

第四部では、ザンジバルのタリーカとスンナの医学の実践についての総括と、一般の民衆を担い手として行なわれるイスラームについての考察が行なわれる。第 10 章では、東アフリカ沿岸部のイスラームの普及から現在までの知の変遷について考察されている。1860 年代以降、ザンジバルに招聘されたハドラマウト出身者によって預言者生誕祭マウリディが開催され、一般のムスリムも参加できるズィクリを伝えることとなる。そうした、民衆へと開かれた実践の形態が作られたものの、独立後の新政府によるアラブ人・インド人の弾圧や、1980 年代からのイスラーム復興運動「アンサール・スンナ」の影響

で、民衆の実践するイスラームを取り巻く状況は大きく変化してきた。その中で、タリーカにおける宗教実践は、クルアーンやハディースに言及のない「多神教的」な要素が徐々に排除されてきたのである。続く第 11 章では、スンナの医学もタリーカが変容してきたのと同様に、「アンサール・スンナ」の担い手が正しいイスラームを実践するために、ウガンガの「非イスラーム的」要素を排除してきたことが指摘される。さらに、ウガンガが秘義的な知識やクルアーンの難解な解釈を治療者に求めていたのに対して、スンナの医学は日頃から実践できるものとして治療方法を簡略化し、治療者養成も積極的に行なっている。

結論部にあたる終章では、民衆のイスラームが、常に時代に順応して変化してきたことが指摘される。活動内容や形態の変容を余儀なくしてきた政治的・社会的な状況を背景に、「イスラーム復興」と「民衆の包摂」が同時に起きているザンジバルの状況が描き出される。結論として著者は、東アフリカの民衆のイスラームを、「順応と葛藤のせめぎ合い」という言葉で表現している。ザンジバル革命以降の政府による宗教活動の制限、1980 年代以降からのイスラーム復興を通じて、タリーカの活動もスンナの医学も、「クルアーンとハディースに忠実であるべき」という風潮の中から試行錯誤の末に、現在の状況まで変化してきたのである。

以上が本書の要約である。著者の実直な参与観察と聞き取りを通じて、ザンジバルのイスラーム実践が、さまざまな社会的影響を受

けて変容してきた過程を、民衆の生活の中に息づく信仰の姿として鮮やかに映し出しているといえるだろう。

一点、スナナの医学に関していえば、正しいイスラームを求める民衆の「順応と葛藤」には、西洋医学の浸透という側面も分析の可能性はあるだろう。それは、西洋医学とスナナの医学で、それぞれ治療の場と対象の棲み分けが行なわれていることから考えられるのではないだろうか。スナナの医学の治療者は自分が診断できない病いもあるため、病院でまず診察を受けるようにと被治療者に伝えている事例が本書には描かれていた。スナナの医学はこの棲み分けに「順応」しているように見受けられるが、西洋医学の治療者にとってこの状況はどのように映っているのだろうか。たとえばスナナの医学の治療法が、西洋医学で治療をする医師からは「非科学的」な「民間療法」として批判を浴びる可能性はあるだろう。また、スナナの医学で治療される「不治の病」も、その「不治」という認識は西洋医学の知識と不可分であり、適切な治療法も時代によって変化するだろう。そうした場合、イスラームとしての正しさを求めることと、西洋医学的な正しさを求めることの対立が生じ、スナナの医学が「葛藤」を覚えることもありうる。このような観点からみれば、宗教弾圧やイスラーム復興運動などのさまざまな条件の下でザンジバルのイスラームが変容を遂げてきたように、時代や社会の変化の中で、西洋医学がスナナの医学の治療実践に影響を与えてきたことも考えられるのではないだろうか。

とはいえ、著者の詳細かつ圧倒的な筆致、さらに治療を受けた実体験の記述は、同様に西アフリカ・セネガルにおける民衆のイスラームを調査・研究している評者にとっても、非常に興味深かった。今後の著者の調査・研究の発展を願い、本稿を締めくくりたい。

深山直子・丸山淳子・木村真希子編。
『先住民からみる現代世界—わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年、288 p.

中村友香 *

本書は、世界各地の先住民 (indigenous peoples) をめぐる事例を取り上げる。そして先住民を名乗る人々からみた世界と、先住民概念をめぐる多種多様な運動や現象について明らかにすることを目的とした論集である。国連先住民権利宣言が先住民の定義を取って避けたことの意味を論じうえで、先住民は「である (being)」という固定化された状態ではなく、「なる (becoming)」ものとして捉えるべきであるという視点に立つ。このことによって、先住民運動を先導してきたグループのみならず、近年先住民主張を始めた新たなグループにも注目し、先住民の「立ち現れ」方を論じる。先住民をめぐるグローバルな運動や宣言がどのような影響をもってきたのか、歴史的背景の異なる場所でどのようなそれが展開したのかについて丁寧に述べら

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科